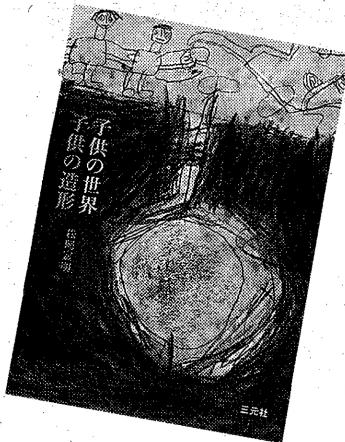


さわる・つかむ・えがく・つくる

子供の世界の追体験から教育を再考する

稻賀繁美



読者の皆さんがどうだろうか。幼少のころ、描きあげた絵得意になつて親や先生に見せた記憶があるだろう。だが話を聞いてもらえるものと期待していたのに邪魔にあらわれたり、詰らぬ注文を付

けられて落胆したり、はづかれて泥団子を握ね、知らずに指や金輪際、絵を描くのが嫌になつたといった、思い出すだけが辛い経験をお持ちの面々も少なくあるまい。本書は、そなした経験が次の世代へと負の循環を重ねることに心を痛めた著者の、親や教師にむけたメッセージ、きわめて良質な配慮に溢れた格好の道しるべといつてよい。

本書が目指すところを三点に要約しよう。まず子供の感覚を取り戻す努力が、親や教師には求められる。例えば四歳児相手の幼稚園児にとっては手で物に触ることじぶんは「絵」を描かせる

何なのか。

次に児童にとって体験とは何なのか。四歳児相手の幼稚園児は、園児に玉葱を描かせようとしたクラスの情景が描かれている。児童たちは玉葱に触りたい。だが玉葱の皮を剥こうとした園児を先生は叱ってしまう。「絵」を描かせる

ことが授業の目的だから。けれども絵が仕上がるこより大切なことがある。玉葱を畠から掘り起こし、皮を剥いて涙を流し、それをお鍋で煮込んだ味わう。そこから玉葱のイメージが子供たちのなかに豊かに膨らみ、根付いてゆく。ではなくして、はたして情操教育はうまくいくだろうか。

第三に、「美術」の再定義。第三回では、完成を目指す造形活動とは、完成を目指すものというより、むしろ心身を体験へと「開いてゆく」活動だと著者は述べる。目的地を括弧に括り、制作の試行錯誤の「下請け」にしかである。「下請け」にしかできないものが「造形遊び」の意義なのに、それ

が「造形遊び」の意味なのに、残念ながら幼稚園や小学校低学年の現場では、その意図が見えず、指導方針に自信が持てず、評価の方法も分からなくなつたため、面倒なのだと云う。ここまで来れば、現場が抱えている問題点も見えてくる。

「子供をする」経験が、今のがある。猫の毛を撫で、砂場で泥団子を握ね、知らずに指で伸ばしたカマキリに鎌で応戦されて痛い思いをする。そして泥団子を握ね、知らずに指で伸ばしたカマキリに鎌で応戦されて痛い思いをする。そ

と「子供をする」経験が、今のがある。今や多くの親にとって子供たちからは奪われてい育ては「一回だけの経験。また兄弟姉妹でも類推が利くことは限らない。さらに幼稚園でも時々に大切な経験を子供たち小学校でも、先生方は規則遵守や校務繁忙のあまり、子供期教育は、ともすれば親や教師の顔色を窺つて優等生的な返答を寄せさせっぱかりを高めてしまう。そのための長い目を見れば将来の可能性豊かに膨らみ、根付いてゆく。ところが目的意識に囚われた早速の結果として、子供たちの「伝えたいたいもの」を聴き落とし、「伝わってくる」ものを感じ損ないがちだ。そ

うした教育の現場を知り尽くした配慮ある反省が、本書には横溢する。

どうして著者はここまで表現力に優れた教師は、自分の図式を児童に押し付け、自分の「下請け」にしかできない。だから教師は失敗経験豊かな劣等生のほうが相応しい。とはいってもどもたちの絵を「見る力」がなければ、指導はかえってマイナスにならる。児童心理学に照らせば、たしかに色彩や線から子供の性格や心理状態を推測することができ。だが占いのよう

に「当たる」と「当たらない」と「伝わってくるもの」と「伝わっていないもの」がある。それを見極めれば、子供の絵には「伝えたいもの」と「伝わっていないもの」である。

（国際日本文化研究センター・総合研究大学院大学）

▼子供の世界 子供の造形
松岡宏明著
2・1刊 A5判一六〇頁 本体一七〇〇円
三元社

造形活動を通して「ちゃんと現場が抱えている問題点も見えてくる。

それが見極めれば、それなりの経験があまほし

と「子供をする」経験が、今のがある。今や多くの親にとって子供たちからは奪われてい育ては「一回だけの経験。また兄弟姉妹でも類推が利くことは限らない。さらに幼稚園でも時々に大切な経験を子供たち小学校でも、先生方は規則遵守や校務繁忙のあまり、子供期教育は、ともすれば親や教師の顔色を窺つて優等生的な返答を寄せさせっぱかりを高めてしまう。そのための長い目を見れば将来の可能性豊かに膨らみ、根付いてゆく。ところが目的意識に囚われた早速の結果として、子供たちの「伝えたいたいもの」を聴き落とし、「伝わってくる」ものを感じ損ないがちだ。そ